



海禅寺新聞 第29号

長期に渡る新型コロナウイルス感染症の流行。ワクチンの効果、その安全性の是非はともかく、この春の訪れとともに前向きな新しい段階に入ってきているように感じます。

そうした中である日本中が揺れた東日本大震災から10年の年月が経過しました。3月に入り、改めてあの悲惨な大震災を見つめる報道が多くされていきました。そして忘れてはならないのは県内で翌日に発生した長野県北部地震（栄村大震災）です。栄村の被害総額（住宅を除く）は、55億円と言われています。改めてこの一連の大震災で命を落とされた方々のご冥福をお祈りすると共に、各所の無事復興を願わずにはおられません。

私は、自分が自然の一部分である、ということ強く感じています。

私と、水や木や草との間には、何の区別もない。同じひとつの流れの中にあるのです。

科学や医学の進歩によって、私達は昔の人よりずっと多くのものが見える様になった。

しかし、その代償として、何か一番大切なものが見えなくなっている様に思うのです。

これはイタリア・南チロル出身の登山家、ラインホルト・メスナーの言葉です。1986年にエベレストをはじめとする8000メートル峰全14座に人類史上初の完全登頂を成し遂げたことで知られています。しかも驚くべきは無酸素、単独で登頂したのです。近年、登山家たちがこうした山々に持ち込んだ山頂付近の大量のゴミが問題になっているようですが、そうした今だからこそ、何も使わず限りなく自分の肉体の力だけで山頂に立ったメスナーの偉業、その価値が見直されています。

「自分が自然の一部分である」。これは一つの普遍的な事実です。にもかかわらず、現代社会にあつて、この真実を実感できる機会は非常に限られています。多発している自然災害や新しい感染症の発生は、私たち人類のこうした心のありようと決して無関係ではないと感じています。ある落語家さんが、「最高の地球保護の方法は人類が滅亡すること」という笑えない冗談を言っていました。大自然に対する謙虚さを人間社会が取り戻したとき、様々な問題の本質的な解決（調和）がなされるのではないかと、そんなことを感じずにはおられません。

生きる力 vol.104 送付

季節ごと、皆さんにお届けしている小冊子「生きる力」。今回の特集は「祈りの実践と生きる力」です。法事やお通夜、葬儀で僧侶が行うあの不思議な作法「洒水加持」の秘密が解説されています。おなじみの特集と合わせて、ぜひ一読ください。

春彼岸会 中日法要のご案内

恒例の春彼岸会法要を海禅寺本堂でお勤めいたします。皆さんで先祖の供養をいたしましょう。どうぞご家族そろってお出かけください。（申込不要）  
日程：令和3年3月20日（土・祝）  
時間：受付 午前10時  
法要 午前10時30分～

※毎回有意義な懇親の場となっている法要終了後の茶話会ですが、今回も感染症流行に配慮して中止します。

※彼岸会中日法要の供養塔婆をご希望の方は、3月18日（木）夕刻までにお申し込みください。（供養塔婆料 一基 3000円）  
電話 026812212972  
ファックス 02681261147

おながい

第10回 聖天祭 開催決定

壇信徒の皆様にご理解とご協力をいただき開催を続けてきた聖天祭は、おかげさまで今年で10回目の節目を迎えます。内容については検討中ですが、感染症に配慮しながら実施する予定です。聖天さんのご利益にあやかりながら、人と人との様々な縁が芽生えるよき一日となるよう、準備を進めて参ります。

そして実行委員会では、お祭りをお手伝いいただける方々を大募集中です。内容は、会場準備・片付け・駐車場係・会場案内回りなどですが、ご無理のない可能なお時間の範囲内に限っても構いません。お祭りを作り上げる喜びを共有していただき、お檀家の皆さん、そして有志のスタッフの皆さん同士が、あたたかな仲間として広がっていくことを願っております。ぜひお気軽にお問い合わせてください。

軽にお問い合わせください。  
※お祭り終了後、別日に慰労会がございます  
※詳細は、追ってお知らせします

【聖天祭 日時】  
日程：令和3年5月16日（日）  
時間：午前10時～午後3時  
入場：無料

よきお願いです しょうてんまつり 聖天祭 スタッフ大募集

聖天祭とは

壇信徒皆様のご寄進により、美しく整った聖天堂。聖天祭は、ご寄附をいただいた皆さんより意義あるものとして広げていきたいと始まったお祭りです。海禅寺に多くの皆さんが集まり、出会い、祈り、そしてこれから繋がるご縁をもっていたくことを願っています。

※10周年を期して、聖天堂内の荘厳再整備を計画しております。今年の聖天祭時にご覧いただけます。がらご参拝できるよう準備しています。

## 副住職の気まぐれ法話

## 人形供養と命の叫び



感染症への不安は拭えない中であつたが海禅寺の恒例行事、人形供養会を今年度も11月23日（勤労感謝の日）に勤修することができた。

回を重ねて36年目、今年もたくさんのお人形さんたちが集まった。年間を通じて供養日以前に人形の受け入れをする事前受付の際は、できるだけお持ちになった方と対話をするように心がけている。本年は人形を供養する動機として、感染症に配慮して外出を控えたぶん、自宅の掃除や身辺整理をし、結果としてお人形を供養することを決めたという方々がとても多かった。

そうしたことからか、これまででは高齢の方が多い傾向にあつたが、今年は全体の割合として年齢の若い方も少なくなつた印象がある。いずれにしても皆さんの言葉の端々からは、思いを寄せてきた人形は単なるモノではなく魂の宿るかけがえのない存在であり、それゆえゴミに捨てることはできず、供養という一事を介してお別れの区切りをつけたいという切なる思いがひしひしと伝わってきた。

こうした思いやりの心が私たちの中にある限り、少々世間が荒れていても「世の中何とかなる、大丈夫だ」という気持ちになる。自分を支えてきたお人形との物語、その最終幕を丁寧に閉じようという思いにこれからも寄り添っていききたい。

ところで人形供養会には毎年大人の参加者のみならず、私が副園長を務める認定こども園芙蓉園の園児さんたち、地元のガールスカウトを始めとする子供たちもお参りにやってくる。

動かぬ人形に躍動感ある命を感じ、共に遊ぶことのできる子供たちの存在は社会の希望である。そして人形供養会で、役割を終えたお人形を丁寧に送り出し、その別れに手を合わせる大人の姿を子供たちが目の当たりにすることは、あらゆるものに命を感じそれを想う文化を繋ぐ大切な場の一つになつていくように感じる。命のかけがえのなさや重さを理解することは理屈ではない。乳幼児期に実感を伴う経験があるか否かは大きな要因となるだろう。

ところで乳幼児期の『命の教育』、これに関して最近非常に気になることがある。それは今、子供たちが出会うエンターテイメントに他者を殺戮する描写が溢れていることだ。

アニメ映画が興行収入の記録を塗り替えていることで話題の、主人公が鬼と化した妹を人間に戻す方法を探すために戦う姿を描く某漫画を知らない方はいないだろう。私が断言したいのはこのアニメーションは幼児が見てよいものではないということだ。もちろん私はこの作品を全否定したいのではない。素晴らしい内容の作品であるからこそ世間の高い評価を得ているのだろうし、何を見るかは個人の自由である。

しかし幼児期の子供に与える悪影響は凄まじいものがある。園の子供たちのごっこ遊びの内容に、このアニメを真似た暴力的な要素が非常に増えた。暴力性を伴うテレビ番組などは以前からあるが、しかしこのアニメの残酷な殺戮シーンは幼児にとってあまりに刺激が強く、その痛みを思いを馳せることのないままにエンターテイメント性だけが浸透している。5、6歳の子供たちが何かに取り憑かれたように殴

り合い闘う様子を想像してみても欲しい。その姿を目の当たりにすると、ある種の恐怖感を覚えることすらある。園児たちと話を聞いて良くわかるのは、彼らは物語の内容を良くわかってない。ただただ痛快に相手を倒していくことのみが頭に染みついているのだ。

またこの作品以外にももう一つ危惧しているのは暴力的に他者を殺戮していくオンラインゲームが大変に流行していることだ。小中学校の教育現場では非常に問題視されているようだが、兄弟の影響で幼児期からこうした刺激に出会ってしまう幼児もでてきた。

脳が発達段階にある子供は感受性が高く、特に強烈な刺激として脳が侵食されてしまう。刺激は耐化されるため、より過激な刺激を求めます。そして幼いがゆえに危険情報の判断ができずに模倣行動に繋が

りやすいとされる。

恐ろしいことに学童期・青年期の子供たちがこうしたゲームに依存した結果、暴力事件や犯罪をおこす事例も出てきた。こうした依存は非常に恐ろしく、薬物以上に克服が困難だという専門家の指摘がある。それはゲーム類自体に社会悪の概念が薄い上、身近にあるスマホを通じていつでもすぐ手に入れることができってしまうからだ。本紙を購読されている仏教者の方達は、よもやこうした暴力的なオンラインゲームなどやらないことだろうが、今、子供達の命の観念が大きく脅かされている。

日本社会における仏教者の役割として大きな割合を占めている死者供養や法事などは、その根底に命への畏敬の念がある。しかし巷にあふれる映画、アニメ、漫画、ゲームには、その命を軽んじる要素が溢れかえっている。殺人や猟奇的描写のエンターテイメントが次々に生産されてばら撒かれ一部の間人が巨万の利益を得て、そしてその魔力に溺れた消費者は狂っていく。このままではよいわけがない。

（本稿は令和3年1月28日刊行の『文化時報』誌に掲載された原稿を、加筆修正したものです）

## 編集後記

二十四節季の一つ『啓蟄』を過ぎた辺りから途端に春らしくなってきました。境内を見回すと、梅の花が開き、ヒヤシンスやチューリップが元氣よく芽吹いています。

海禅寺では現在、新たな永代供養墓の造立計画を進めております。これまでにない集合墓をご提案できたらと智恵を絞っております。次号で具体的にご紹介いたします。



海禅寺不動堂に安置されている制多迦童子（せいたかどうじ）不動明王の脇侍